英国大学院留学日記
News Letter VOL.02
発行／2023年3月31日　発行者／宮﨑稔樹(国際ロータリー財団グローバル補助金留学生/第2740地区)

初めてのショートドキュメンタリー制作

大学が授業外で提供するワークショップに参加

今回は私が授業とは別で参加したワークショップ(WS)についての報告です。イーストアングリア大学の国際開発部では実践スキルの向上を目的に、開発学に関連した複数の専門プログラムが提供されています。デジタル地図の作成やグラフィックデザインなど様々なものがある中で、私が選んだのは「フィルムメイキング」。映像業界で活躍する講師を招き、映像制作のノウハウを学ぶ内容でした。新聞記者としての経験から写真撮影の心得はあるものの、映像制作については全くの素人。自分の表現の幅を広げる絶好の機会だと考え、参加を決めました。

3分間の映像作品の企画を英語で説明

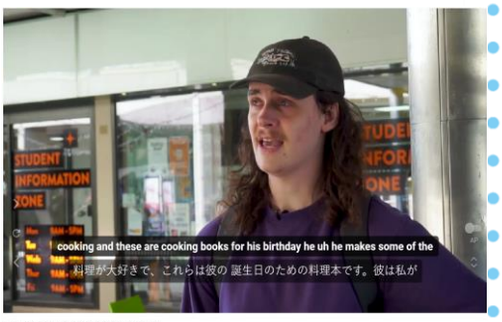
WSは座学1日、取材・撮影1日、編集1日というタイトなスケジュールで、最終的には3分間の映像制作が課されます。流れは、15人の参加者がそれぞれ企画を持ち寄り、コンペティションで4つに絞った後にチームを組んで作業を進めるというものでした。言語の壁、住み始めて日が浅い地域という条件の中で、私が思い付いたのは、学生が大学内で受け取る郵便物に焦点を当てる作品。小包み一つ一つから垣間見える学生の人生を見つめようと考えました。英語での企画意図の説明は大変だったものの、取材の実現可能性など総合的な判断で、4つのプロジェクトの一つに選ばれ、ディレクターとして仲間2人を率いて取材を開始しました。

きっかけは実家から届いた贈り物

そもそもこの企画を思いついたきっかけは、長崎の両親から届いた荷物でした。数か月ぶりに見る母語で書かれたLサイズの段ボール。1万9000㌔近い長旅で少しヨレヨレになった側面には<島原(SHIMABARA)>と故郷の切手が貼ってありました。箱を開ければ、日清カップヌードルや松茸の味お吸い物、鍋の素など私の好きなものが詰まっていました。国際郵便というのは手続きが面倒で、内容物を英語で記載しないといけません。両親が慣れない英語で作業を進めてくれたことにも頭が下がる思いでした。

郵便物というのは常に誰かの思いが込められているし、そこには必ずヒューマンストーリーがあると思います。一人暮らしを始めたばかりのイギリス人学生も、遠い国からの留学生も、家族から送られてくる郵便物をいつも楽しみにしています。それは「日常の中の小さな幸せ」なのかもしれませんが、孤独な時に心の支えになるものでしょう。

今回のショートドキュメンタリーでは、そんな「小さな幸せ」を一つ一つの郵便物から見つめたいと考えました。当初はそれぞれの郵便物から見える多様性や国籍の違いについて考える作品にするつもりでした。しかし、取材の過程で見えたのは「国籍が違っても贈り物は人を幸せにする」という点。最終的には違いではなく、共通点に目が向きました。



Filmmaking for Development - My Post

嬉しかった友人の言葉

結果として嬉しかったのは、イギリスの公共放送BBCのナイジェリア支局出身の友人から「４つの作品の中で、君の作品がナンバーワンだ」と言ってもらえたこと。一緒にチームを組んだ仲間たちにも大感謝です。最終的には内容が評価され、大学の公式YouTubeチャンネルにも投稿されることになりました。映像の魅力を知った3日間でした。動画は下記URLから視聴可能なので、是非とも御覧あれ。https://www.youtube.com/watch?v=X5uZdzKhO68。